

◆市庭古墳の調査

—第282-13次・第282-11次・第282-12次

1 はじめに

今年度、市庭古墳（平城天皇楊梅陵）後円部周濠・外周濠の周辺で、3ヶ次の調査をおこなった。いずれも住宅建設にともなう事前調査である。報告は、内側の周濠の調査（第282-13次調査）を先に述べ、次いで外周濠の調査（第282-11次・第282-12次）の順とする。

2 周濠の調査（第282-13次）

調査区の概要

調査区は市庭古墳（平城天皇楊梅陵）後円部東側の周濠と周堤部分にあたる。周濠にはほぼ直交するよう、当初、開発予定地の西半に南北3m×東西22mの調査区と、東半にこれより北に2mずらして南北3m×東西17.5mの調査区を設定したが、後に東西両調査区をつなぐように拡張したため、最終的には面積約120㎡のクランク状をなす調査区となった。調査期間は平成10年1月13日から3月4日までである。

基本層序

調査区内は各所で近代以降の大規模なゴミ捨て穴による攪乱を受けており、それ以前の土層を観察できる部分は限られている。東区では地表から表土（20～30cm）、中世の遺物を含む橙褐色土（20～40cm）の下に標高約75.0mの所で淡青灰粘土の地山を検出した。西区の東端から7mまでの範囲では、淡青灰粘土の地山がなくなり、その下にある淡黄灰褐色土がみえる部分がある。これより西、すなわち周濠部分では表土（約50cm）の下で奈良時代の整地土を検出した。

検出遺構

SG2150 市庭古墳周濠。西調査区西半において、地表下約3.5m（標高72.0m）で周濠の底を確認した。土層は

上から表土が約0.5m、奈良時代の整地土（黄褐色土、灰茶色土、赤茶褐色土）が約2.0m、周濠の堆積土（灰色粘質土、木屑混暗茶色土）が約1.0mであった。

SX2170 市庭古墳周堤。淡黄灰褐色土の地山を削りだして斜面を造った上に、赤褐色の土を積んで周堤を築いている状況を確認した。後世に削平を受けており、上面では地山が露出し、古墳にともなう埴輪などの施設は認められなかった。現存する周堤積み土上面の標高は74.8mである。

SX230 市庭古墳周堤の葺石。周堤内側（西斜面）には南北3m、東西1.5mの範囲にわたって、こぶし大～直径20cm程度の葺石の裏込石が残っていた（一部後世に欠失）。裏込石は周堤積み土の上に灰色粘質土を詰めながら据えている状況を確認できた。斜面の傾斜角度は約30度である。

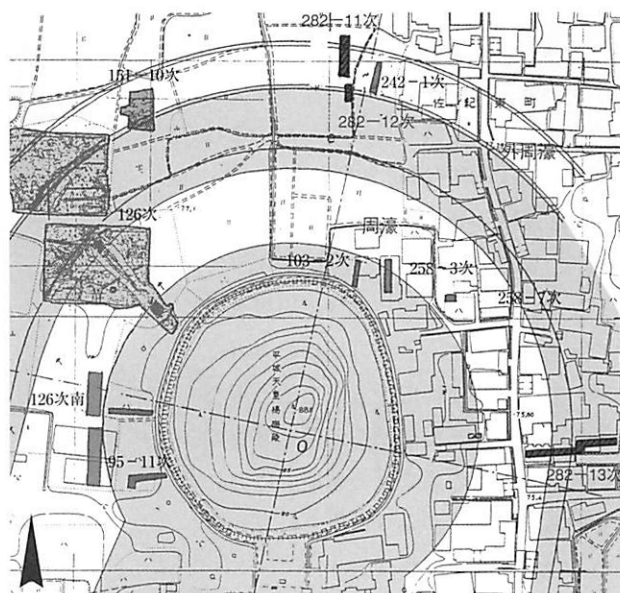


図80 調査位置と墳丘復原案 1：3000

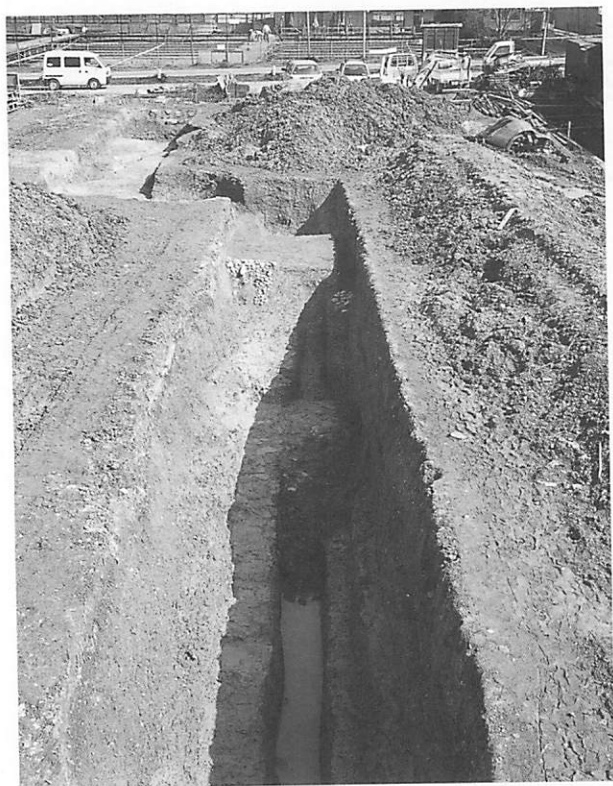


図81 第282-13次調査区全景（西からみる）

出土遺物

遺物はほとんど出土しておらず、わずかに表土に混入した埴輪片がある程度である。

まとめ

本調査では市庭古墳後円部東側で初めて周堤西側の落ちを確認した。これは従来の市庭古墳復元案（岸本直文『市庭古墳の復元』『文化財論叢Ⅱ』1995）にほぼ整合するとみてよい。

なお、後円部東側における周堤東側の落ちの位置、および外周濠の存否については、東側に広がる水上池と重なることもあり、従来から問題とされていたが、今回の調査区の範囲ではこれを知るための手がかりは得られなかった。今後の調査に委ねたい。

（古尾谷知浩）

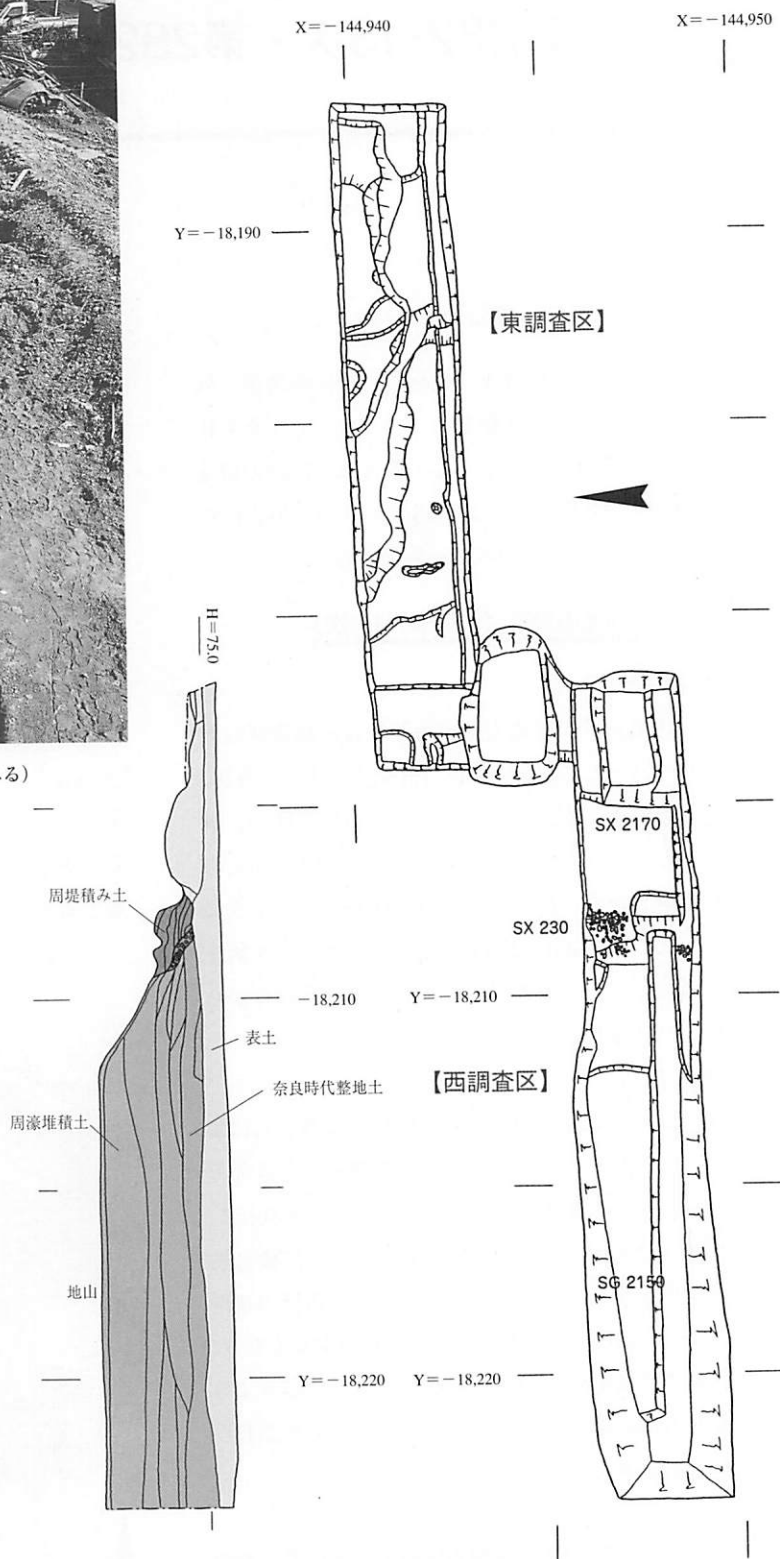


図82 第282-13次調査 西調査区南壁断面図（左）・遺構平面図（右）1：200

3 外周濠の調査 (第282-11・-12次)

第282-11次調査

調査面積は南北17m×東西3mの51㎡である。調査区は1993年度におこなった第242-1次調査区の約10m西にあたる。調査は市庭古墳外周濠への北側外堤部からの落ちを確認することを目的とした。調査区の北端では地山面を現地表下約0.7mで確認し、北から約3分の1の地点から地山面が南へ緩く傾斜し始め、南端では約1.1mの深さとなる。これは外周濠への明確な落ちとはいえないが、外堤部が削平された外周濠の痕跡 (SX217) であろう。なお、地山面の北半は黄白色粘土、南半は黄褐色バラスである。

この他に検出した主な遺構は、調査区北端にある土坑とそれを切る幅1m、深さ0.2mの東西溝SD215である。ただし、遺物が含まれていないため、いずれも時期は不明だが、奈良時代に遡る可能性もある。

第282-12次調査

本調査では、市庭古墳の内堤から外周濠への落ちを確認し、北接する第282-11次調査の成果と合わせて、外周

濠の幅を推定することを目的とした。

検出した主な遺構は、幅40cm、深さ50cmの斜行溝SD220と斜行溝北端における落ち込みSX225である。溝内から遺物は出土していないが、堆積土の状況からみて、この溝は奈良時代のもと思われる。また、斜行溝北端における落ち込みSX225では、堆積土は下から①地山 (黄褐色バラス) の落ち込み、②下層堆積土、③15～20cmの大きさの石列、④上層堆積土に混じる5～10cmの小礫を含む層、に分けられる。斜行溝SD220の堆積土は、②の下層堆積土と基本的に同じであり、③の石列が斜行溝の入口を止めるように置かれている。市庭古墳の外周濠は奈良時代に庭園への再利用が考えられるため、斜行溝、北端の石列および落ち込みは庭園に関係する遺構の可能性もある。また、発掘区中央付近より北に向かって地山が緩やかに傾斜しており、内堤から外周濠への落ちの痕跡と考えられる。第282-11次調査で推定された外周濠北端の傾斜変換線と本調査の外周濠南端と思われる傾斜変換線間の距離は約17mとなる。これは第126次調査 (昭和55年度) で確認された外周濠の幅 (肩部で18m、溝底で16m) に近い。

(館野和己・高妻洋成)

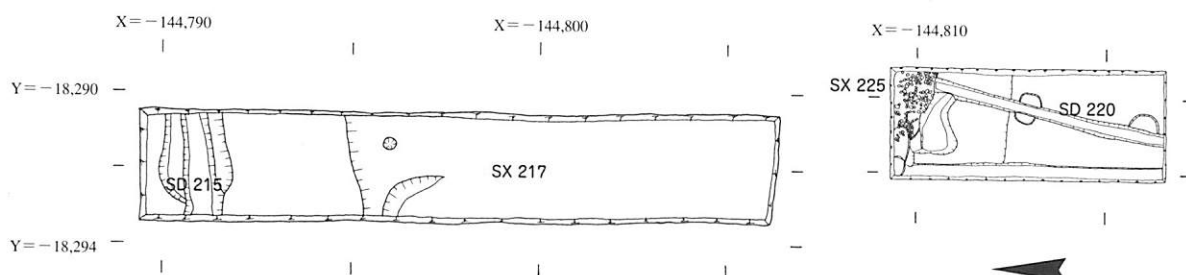


図83 第282-11次 (左)・282-12次 (右) 調査 遺構平面図 1:200

平 城 専 こらむ 欄 ③

◆伊東太作さん退官記念サッカー

奈文研サッカー部設立当初からのメンバーで、ゴールキーパーとして大活躍された伊東太作さんが本年3月末日をもって定年退官された。それに先立つ3月14日 (土)、伊東さんの退官記念歓送サッカー大会を開催した。この日は吉備池廃寺の現地説明会と重なり、藤原サッカー部員が参加できなかったのは残念であった。しかし、それでも

20人以上の関係者が試合に集結し、伊東さんの退官を祝った。相手は奈文研OBのU氏率いる某女子大学サッカー部コーチ陣チーム。要するに、下心の固まりのような男どもの集団?であり、われら硬派の平城サイトの敵ではなく、試合は3対0で圧勝!伊東さんも10分ばかりゴールマウスにたち、みごと敵の攻撃を零封した。

なお、ここ数年、サイトの得点源

として奮闘してきたJ通信の寺沢記者をはじめ、K通信の福岡記者、Y新聞の渡辺記者が、いずれも人事異動で転出。この日は、この3人のジャーナリストの歓送サッカー試合ともなった。試合後は、お好み焼き屋「萬福亭」で祝賀会。記念品として、伊東さんには寄書したフランスワールドカップ専用ボール、他の3名には恒例のミニ・ボールを贈呈した。

(A)